

文化遺産の保存活用

東京大学 特任教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

軍艦島

この秋の日本列島は幾度となく台風や大雨に襲われ、各地で様々な被害が発生した。そんななか、九月末にはある世界文化遺産が見学不能になった。長崎市端島、^{はしま}「軍艦島」の名でも知られる炭鉱の島である。

戦前の富国強兵、戦後の経済成長に伴う旺盛な石炭需要に因應べく、この島にはかつて多くの技術者や炭鉱労働者とその家族が移り住んだ。多い時は五、〇〇〇人以上の人が暮らしていたという。

軍艦島は一つの町だった。働く人々とその家族のための集合住宅

に学校、各種の厚生施設に生産施設、そして神社までもが、限られた面積の島の中に大都市並みの密度で建てられた。それらの建設は一九一〇年代に始まり一九七〇年代まで半世紀以上にわたって続いた。ところが高度経済成長の終焉とともに炭鉱は閉山。それに伴って一九七四年までに全住民が転出を

余儀なくされ、島内の建物群は悉く廃墟になった。以来、島の所有権の譲渡(三菱グループの企業から高島町へ)はあったものの、それらを取り壊す理由も機会もなかったのだらう。四〇年以上の間、人の住まない廃墟のままであり続けた。海上で軍艦と見紛う程の威容、かつての炭鉱町の暮らしを思い起

こさせる建物群、日本でも早い部類の一九一〇年代竣工のものもある鉄筋コンクリート構造物の劣化のあり様、そして何よりも島全体がほぼ手付かずの廃墟だという珍しさにひきつけられて、この四〇年の間にも多くの人が上陸したと思う。私も、十数年前に建物の劣化調査のために上陸して心動かされた経験がある。

ただし、軍艦島は廃墟であって観光地ではなかった。整備や維持保全のためのまとまった投資は行われていなかったらうと思う。それが、二〇一五年に「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の一部として廃墟のまま世界

文化遺産に登録されたのである。

同じ文化遺産でも「世界」を冠すれば、そのブランド力が観光客を引き寄せ、結果として島とその周辺の観光収入は大きなものになる。かなりのしかも継続的な出費を伴う廃墟の保存を可能なものにできるかもしれない。けれども、今回の台風に伴う上陸見合わせに見られるように、観光客を迎え入れられる安全の確保等を考えると、その運営に多くの苦勞を伴うことは想像に難くない。

登録有形文化財に なった団地

「世界」は例外的だが、今日の日本では竣工後半世紀を過ぎたような建物の層はすこぶる厚くなり、建設後五〇年経過が条件の一つとされる「登録有形文化財」の候補建物は急増している。実際、文化庁の発表(二〇一九年三月二十九日)によると建築物の登録数は九、五四九件に達している。ちなみに土木構造物は六三五件である。



軍艦島の一部。(2008年離岸する船より筆者撮影)

そんななか、還暦過ぎの私などにはまだ記憶に新しい日常的な建物も登録有形文化財になり始めている。

二〇一九年七月に開催された国の文化審議会において、日本住宅公団(現在のUR都市機構)が一九六二年に管理を開始した旧赤羽台団地(東京都北区)のポイント型住棟(スターハウス)を含む四棟が、国の登録有形文化財(建造物)に登

録するよう答申された。団地としては初のことである。実はその前年に、(一社)日本建築学会もUR都市機構に対して「UR都市機構赤羽台団地の既存住棟(四一、四二、四三、四四号棟)の保存活用に関する要望書」を提出していたから、

元々文化財としての価値には太鼓判が押されていたのだが、問題はここからだ。一体どう保存活用していくのか。

ストック経営に挑戦

赤羽台団地に関しては、それが優れて公共性を帯びた空間であることもあつて、保存活用を要望した日本建築学会内に専門の委員会を設けて、これから三年程の時間をかけて活用法を検討することになっている。空になった鉄筋コンクリートの箱の中に、新しい住の形を組み込んでみるとか、学生たちの若々しい提案を実装してみるとか、ストック改修の技術者育成の生きた教材として使ってもらおうとか、その成果を一般の方々に広く公開するとか、色々とアイデアは出るだろう。しかし、問題はこれから長きにわたってそうした面白く意義のある活用を継続していくことができるのか、その組織的、財政的な裏付けになるだろう。

これは一例に過ぎない。今後建築界では、この種のストック経営、文化財経営が大きな位置を占めてくるに違いない。機会を見つけては果敢な挑戦を積み重ね、その経験を広く共有して活動基盤を固めていくほかない。